

三河 アララギ

2019年11月 霜月 しもつき

十 一 月 号

第 六 十 六 卷 第 十 一 号



ニューヨーク日記(157) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

IT'S AUTUMN IN NY

Blue Shoe Diaries



秋だね～ 紅葉だね～ 食欲の秋だね～ 日本へ行って秋刀魚が食べたいな～ 銀杏もいいな～ 最近道のフルーツスタンドでは柿を売り出してるのが嬉しい！ 近くのジェラート屋さんでは柿のジェラートがおいし～ ん～ 栗も食べたい時期だね。

It's autumn in NY! My most favorite season in almost any city. The weather's perfect, the trees pretty, the food yummy! Mmmm, the food. I have a craving to go to Japan for some sanma (Pacific saury), toasted ginko nuts, and lots more... The fruit stands here started selling persimmon. My favorite fruit! And this year, Grom is serving persimmon gelato! Ooooh~ it's chestnut season too. So many goodies to be had. Definitely my favorite season.

目次

第六十六卷第十一号(通卷七九一号)

表紙・南瓜	今泉 由利 (1)	三田美奈子 (24)	山迫 京子 (33)
ニューヨーク日記(157)	Blue Shoe (2)	水野 絹子 (24)	山元 正規 (34)
アカンサスの徑	御津 磯夫 (4)	牧原 規恵 (25)	植村 公女 (34)
ははきくさII	大須賀寿恵 (5)	稲吉 友江 (25)	今泉 如雲 (34)
歌集「續草々」	今泉 米子 (6)	鈴木美耶子 (25)	今泉 由利 (35)
はゝきくさII	河原 静誠 (7)	吉見 幸子 (25)	杉浦 弘 (35)
のれんゆれて	岡本八千代 (8)	牧原 正枝 (25)	田中 清秀 (36)
中秋の名月	弓谷 久子 (10)	佐藤 優花 (26)	丸山醉宵子 (38)
千一番目	今泉 由利 (12)	田村 麻実 (26)	山本紀久雄 (40)
月見酒	安藤 和代 (14)	梅崎 沙彩 (26)	今泉 雅勝 (42)
山ゆり	清澤 範子 (15)	砂川 実結 (26)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
ぼやき	伊藤 忠男 (16)	神田 蓉 (27)	「江上浩二の独り言」
神も仏も	矢崎 直人 (17)	原 彩佳 (27)	漢詩研修(三十七)
彼岸花	森岡 陽子 (18)	小太刀玲奈 (27)	奥の細道
サルスベリ	白井 信昭 (19)	尾崎 一美 (27)	藍水先生の詩
柳田國男	杉浦恵美子 (20)	森岡 陽子 (28)	萬葉秀歌の鑑賞
若き日の	山口千恵子 (21)	高橋 育郎 (30)	雨(1)
表彰状	阿部 淑子 (22)	森岡 陽子 (32)	「氷魚」のことから(226)
雨	夏目 勝弘 (23)	松本 周二 (32)	編集室だより(二〇一九年九月)
『いこよせ』	石田 文子 (24)	田中 清秀 (32)	今泉 由利 (58)
『いとはとぎ』	森 厚子 (24)	浜田 紀政 (33)	野菜・まんだら(21)
	山崎 俊子 (24)	重野 善恵 (33)	「三河アララギ」について
			(60)

アカンサスの徑

御 津 磯 夫

いくらかは不平不満も言ひあひて秋の夕べの菜飯をかこむ
散り過ぐるものら終りてしづまれる冬木の園をめぐりて帰る
なほたゆく起きて歩めばまつよひのきのふの花に梅雨の朝露
日を浴びて縁には蘭の二つ鉢鹿に食はれしあとまたみどり
近道と知るゆゑとほり抜けてゆく東塔の土壇の礎のうへを
新しき年のはじめに登りゆく継ぎ来し四代ぞ城址の山
菩提樹の巨木の冬木白々と光さす観音の御扉のうち
街にいでてさげて帰るはみづからの食ふものにして食ふものは重し
東国の歌の一語を忘れてはて恥づるも老いのわれの一日
萬葉をいくたび讀みて萬葉を知らざる嘆きまたかさねゆく

ははきくさⅡ

大須賀寿恵

吾が腕に抱へて余るストケシア渥美福江の河合先生より

夾竹桃の花をくぐりて市教委の補助金監査にわれは来にけり

教員の復職審査のきびしさを吾は説きつつ茶をすすめゐる

カンボジャの出土の古銭吾の掌におきて酔ひたる君立ちあがる

刈安の穂に立つ音羽の川べりを歩みつつをり悲しみ持ちて

君の便り遠くなりしを思ひつつ真夏の歩道の石をけりゆく

フリル多き娘のブラウスをわがもらひ明日より着むとボタンつけ替ふ

病みながら水をそそぎて挿したまひしダチュラの苗を吾もいたたく

眠り薬より眼覚めし朝のたゆくして露ふりこぼす葉鶏頭による

麻痺強くなり来し足を撫でながら臥床に入りぬ未だ明るきに

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

あるがままに過ぎし一生よの歌一首深く彫られたり石の面に

曾祖父の縁ゆかりの寺のこの石文いしふみ阿弥陀如来にま対つひ建ち

碑の立つ天龍の白妙に雨過ぎにけりいよよさやけく

二花三花白玉椿咲きはじむ石文に白き光さすごと

石文の石の肌への深々と色なきいろに昨夜よべすぎし雨

のろのろと小包の紐解きてをり切ればいいよと言ふ声のする

どうして食ふ物なのかと置きてゆく己が畑のキウイ小玉

常の日となりたる窓に見てをりぬ蕾まだ固き馬酔木の風を

長きとも思はず直ただに従ひき三河アラギのわが五十年

夜の部屋の壁にうつれる豊かなる影は紅梅の蕾開くる

はゞきくさⅡ

河原静誠

園児らと水の行方を話し合ふ窓辺を激しく雨の降りつく

三才児保育資料を読みかへす母を呼びたることもなくして

野球あそび了へて幼等口々に明日もといひてかへりゆきたり

鍵っ子のとみゑの後に尾をふりて今日もしたがふ野良犬二匹

明日よりは延長保育始めなむ午睡の布団を高くつみあぐ

園児等のひるねの姿みおろして給食日誌をわが記しをり

幼な等は食ふまねをしてくだきゆく泥まんじゅんをその手にうけて

幼な等の昼寝してゐる傍に七夕まつりのこよりをよりぬ

園児らの午睡の窓に乗鞍の村に買ひし風鈴つるす

台風の予報に休園となりし午後幼な等の来て遊ぶ声する

のれんゆれて

蒲郡 岡本八千代

藍淡き夏ののれんのゆれてをり絵を描きてゐし君の姿よ

長く細きのれんの向かうの姿に君に声かけたるも減多になかりき

けふもまた入り日の日ざしの薄くして君との思ひ出ばかりが浮かぶ

老ゆらくは老ゆらくらしきと思ひつつ静かに啜る朝の味噌汁

いたゞきし三州海苔の「混焼のり」に独りの朝餉のたのしくなりつつ

遠白く矢羽薄の穂がゆれる時々見つつ独りの朝餉

心配せし台風十七号も岬の町西浦へは来ず何処へか去りつ

うすき眉にうす色眉ずみほのなぞり先づは私の常の薄化粧

淡淡と朝餉すまして新聞読むパターンとなりつつ独りの生活くらし

入りつ日を背せなにうけつつ杖つきでどこへともなく歩きだしたり

今夜また往還集を読まむとすその天金が忽ち光れり

往還集は土屋文明の歌集にてそを下されし友をこそ偲ぶ

わが歌を共に語らふ人もなく今夜ふる秋の雨の音かな

浮かびくる自然じねん法爾ほうにといふことは更けゆく秋の夜々にして

籠こもりたるわれの独りのこの部屋にはやも東の秋のあけぼの

中秋の名月

豊川 弓谷 久子

早計と子に言はれつつ仕舞いたる夏着又出す今日の残暑よ

みさと運転の車に乗りぬ久びさの外出となる今日診察日

コンパクトにて足早と聞きし台風は荒れ狂ひたり千葉県を

被災者はいかに過されむ停電と断水猛暑に大雨となる

老猫もすんなり生活にとけ込みぬ転居してより今日一ヶ月

中秋の名月縁より東の間仰ぐ東の間なれど心足りをり

何と無く心浮きをり中秋の名月の今日我が誕生日

楽しかった思い出のみを拾ひて生きむ余生もよしと信じて生きむ

今年又廻轉寿司にて我が誕生日祝いくれをり家族の四人

蟋蟀の声の合間の鉦叩き耳をすまして聞く秋の夜

「鉦たたき信濃のくに行き行かば」好きな名歌が心をよぎる

寿恵先生と静誠様と石黒さん輪読会の夜なつかしき

身の上話しんみり聞きし夜もありき静誠様はみなしごなりき

半年ぶりに夫のお墓の前に佇つ明日は秋の彼岸の入りの日ぞ

彼岸花が彼岸におくれて咲き出しぬ残暑きびしき九月も逝くか

千一番目

東京 今泉 由利

天井は鰯雲にてマリンスタジアム最高音は天へのぼる

幾万の人の集へるなかにして今出来上がるリズムに浸る

自らの心のままに自らの身体のままに今日も過ぎしぬ

土となる過程見えつつ葉っぱ葉っぱ踏みしめている武蔵野面

あるがまま自然に近く保たれてふかふかとゆく武蔵野の道

柔らかき弾力ありてやさしやさし幾歲月の落葉積むらむ

ふうわりと反発のあり足裏に土となりゆく葉っぱ敷く道

演習林案内図のコノシメトンボ小さく赤くツイと飛びこし

石幢の六角地藏尊に導びかれ武蔵野段丘ふかふかとゆく

大地より直ぐ立つ檜大木よ角材小さく釈尊彫りをり

風吹かば風神思ひ雷あれば雷神思ふそして過ぐ日々

一千三十二躰尊像の御前にひとりわが身に受くる金の耀かがよひ

千体の千手観音の千のお顔一体一体あいさつしている

蓮華王を背せなより見守る行像尊このお教えを思います

千一番目の行像尊ただ一体蓮華王の背後を守る

月見酒

豊川 安藤 和代

蟬が木の下の草ではこほろぎが合唱している処暑の夕暮れ

朝の窓祭礼のごと賑やかに雀の声よ吾もうかるる

台風の逸れていけども喜べぬ行く先ざきの人を思えば

川岸をジョギングする人歩く人タオルを首に秋風の中

何ゆえか真夜なく犬を叱りをり月に大きく影を落して

縁側にりんどう活けて月見酒ひとりがよろしいひとりぞよろし

入りつ陽が東の雲を染めていくカラス鳴けなけ明日も楽し

幼な日の仲よしの友今も友週に三日は長電話する

日び稲は実り色濃く鰯雲夫よそちらももう秋ですか

月十首歌を詠みきて五十余年雨に色あり風に香のあり

実り田をがつつりと抱き石巻山豊作満作夕日に染まる

父母と叔母嫁夫を偲ばせて咲き初む菊に細き雨降る

山ゆり

春日井 清澤 範子

堤防のガードレールに添ひて咲く紅き萩の花は所どころに

白露の今日土手に紅の萩の花は蒲の中に混じりて咲きぬ

床の中にて明日の献立思ひをり庭に鈴虫の鳴く夜にして

夫の髪をオールバックに切り揃へ今日の仕事の一つ終えたり

オールバックに夫の髪を切り揃え夕餉の仕度にとりかかりたり

雨の中にも鳥の声あり廊下より庭に育ちし椿見てをり

婿もなき娘と暮せば折々にそれも良きかなと一人思へり

隣の家のバラのアーチは美しき吹く風に花びら吾が側溝に

神社にて鳴く鳥は何ぞ木立の中夫は言ふなりしないやぐつみと

吾が好む山ゆりの咲くふる里を思ひ出しをり娘に語るも

娘が取りて吾にくれたる山ゆりは一本に三ツの蕾持ちをり

今日は雨の降る一日にしてシルバーカー押して歩けず室にて静養

ぼやき

大阪 伊藤 忠 男

秋風に揺れるカーテンどこしか寂しさ運ぶ独り寝の夜

道沿いに重なり伝う声の波声援すらも掻き消さるなり

後輩の走る姿に我重ね超える限界その先に夢

栄光は努力し者の勲章か気持ち高ぶる日本橋筋

増税のしわ寄せ響く中小手準備の支出思いの他なり

風被害甘く見ていた都市の町電気通らぬ日々地獄なり

屋根壊れ雨漏り住めぬ損壊を一部というがなにがなにやら

前後ろ坑あけ同時その精度技術の高さ今さらにして

泉質の変わらぬことに安堵する何はなくとも朝の湯けむり

ばやきとてストレス貯まるこの時世穏やか暮らし日々祈るのみ

神も仏も

東京 矢崎直人

榛名山台風近く雲かかる達乃珈琲堂モーニングセット

南吉の命を思ふその心いつまでもつか常に不安な

南吉の勤め始めし頃の顔はにかむそれは少年らしく

「ごんぎつん」絵本に揺れる朗読の声につられて魂震え

「万葉集」生涯かけて明らめた令和に訪いし文明の部屋

ふるさとを愛する強き眼差し詩人と古墳登り嬉しき

学生時お世話になりし鋸南町台風十五号被害凄まじ

笛太鼓歌に踊りや祭の夜音に誘われ神も仏も

松方の数奇な運命コレクション辿りてこの眼観られる奇跡

フィンランド女性芸術家自立して情熱燃やし挑む常識

そのポーズしてみても子ども頼んでも難しいかな「考える人」

彼岸花

東京 森岡陽子

みいんみいんトーンダウンし夏蟬にたまに合唱つくつくぼうし

外人墓地坂道沿いのコーヒー店木造りのメニューオリーブの木と並ぶ

梅干にしっかり守られ夏を越へらつきよう増えし残暑乗り切る

夕刻に早々三日月すぐ下に星一つだけ空の高さに

皇居前俳人芭蕉と旅をする奥の細道出光美術館

俳諧にまつわる美術楽しむは号は「はせを」の書画短冊

雨風の激しき音の聞へ来るボリウム上る夜更けのラジオ

墓参り石段の横彼岸花真っ直ぐ伸びし莖の太さよ

台風に半分色づく柿の実は屋根に転がる三つも四つも

サルスベリ

豊川 白井 信昭

さ庭辺にナスとキュウリの曲がる日日照不足を嘆く妻と我

花壇にピーマン幾本悉くカメムシに食わるなす術もなし

朝よりは日差し照りつけ油蟬何処からともなく頻り鳴く声

わが家のノボタンの花紫に東の軒端^{のきば}今を盛りと

ノボタンと隣家のムクゲ駐車場挟み咲き継ぐ紫

農道を行在所跡まがる角農用水のせせらげる音

尖り立つ御堂山くつきりと朝の窓二階廊下に秋の風見ゆ

のうぜんの花散り落つる道通る磯夫記念館行き帰りにして

星越えの坂道下りつこの夜は中秋の名月遠くぼんやり

柳田國男

蒲郡 杉浦恵美子

我が植ゑて実を採り食すも我のみの白無花果が今年も熟しぬ

姫路城左の窓に現れてゆつくり遠のく播但線は

播但線開扉ボタンを押す少女懼れつつ見る旅人我は

駅前新しいけど無機質の柳田國男の故郷か此処は

さて我は柳田國男の生家をば訪ねたいけど途方に暮れをり

日本一小さき家と称したる柳田國男の生家は茅葺き

小さくも床の間があり土間広く柳田國男の生家ゆかしき

さればとてこの家に一家八人は暮しを如何に遣り繰りせしか

先程来誰ひとり来ぬ薄暗き柳田國男の生家去り難し

生家見ることのみ長年願ひ来て叶ひし後は何か虚しい

もう二度と来ることのない福崎の市川沿ひを漫ろ歩けり

揖保の糸求めんとしてふと思ふ播州平野は母方の祖地

長閑なる秋の一日隣家より造作の音時折聞こゆ

若き日の

豊川 山口千恵子

若き日のわれの短歌の一首のる古き雑誌をわが見つけたり

二つ割のゴーヤのわたを出してゐる意外に少なし入りたる種の

突然につくつく法師なき始む少し涼しくなりしこの朝

この夏の猛暑もいつか治まりて法師蟬なく声ものの悲し

ぐらぐらの奥歯一本あるゆえに物食む時に気にしてをりぬ

窓開ければ朝涼しき風の入る夏の終りて秋になる日々

何となく心はなやぐ心地する指先光るマニキュアの爪

夏の日に芽生えて列なす大豆の畝夕べの雨に土の潤ふ

休耕の田に芽生えたる大豆の芽規則正しく列なしてゐる

敬老の日とて夕方娘の来たり持ち来しカステラ共に食べた

今宵あたり花咲かむ月下美人九月に入りて蒼三つ見ゆ

表彰状

横浜 阿部 淑子

国連の温室ガスの対策にスイスの少女の熱意に学ぶ

温暖化進みて台風力増し電柱の修復強靱を目ざして

台風で停電続き原始なる生活限界推察の域を越ゆ

彼岸花咲き揃いてもまだ夏日蟬も鳴けると競う声して

猫背をば矯正しつつ歩き終え気づけば今日も夕日沈みぬ

夫と共に通所続けて七百回「よく通った。」と表彰状に感謝

雨

豊川 夏目勝弘

雨降れば書屋に籠り一日を過ぐす見えぬ雨足を宙に見つむる

この雨は何故どうして出来るのか他愛なき思ひにしばしをめぐらす

雨のこと知らむと書店を巡りつつようやく「雨」の一冊を手

雨が降るああ雨かと思ふのみそんな常なる生き方なりき

雨降れば厭ひ旱は天に願ふ己が心の乏しかりけり

一冊の本より得し知識もて湧き立つ積乱雲の頂を見る

もくもくと湧き立つ雲の峰くずれ台形なせる積乱雲は

新しく得し知識にて見つめゐるこの積乱雲は一万五千メートル

南より黒雲ゆつくり我が頭上台風よりの微粒子を含み

太陽を三十年かけ廻りゐるタイタンにもボタン雪なすメタンの雨が

タイタンにも積乱雲が立つといふその高さは四万メートル

常に降る雨は雨かと思ひこし我が足下には知らぬことばかり

『いっよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

窓の外昨夜の熱気そのまゝに淀みし朝の空気入り来る

石田 文子

田の畦をすべりつつ進む女の子ローラースケート自在に操り

やうやうに鬼灯提灯しつらへて静心にて盆会まつ夕べ

森 厚子

思ひ立ち夕べの散歩に山の道白百合白くさきてゐるかな

水を撒く水のしたたり眺めつつ山菅の実も青き水玉

山崎 俊子

遠くよりボールの音は絶え間なくあの少年か蟬しぐれのなか

送り火を焚きて見上ぐるけふの空はや夕月のほのかなひかり

三田 美奈子

耳の治療けふにて終りぬあんみつを買ひて帰れり夏のまひるま

子頼みのスマホの乗り換えちんぷんかんもやもや悄げる高齡者われ

水野 絹子

夫と息子の会話途切れる昼餉時たかが数秒われには永しか

三河湾の遠きネオンの輝きて対岸は暗きに赤き月かな
灼熱に息も耐へ耐へのわが畑も二日続きの雨に活き活き

牧原 規惠

盆過ぎて潮の退くごと子等帰り広きわが部屋に夕風ふき来
遠き日の思ひ出語る母の眼の奥に輝くあの頃の母が

稲吉 友江

夫と見しふたつの虹の橋のこと静かに語れり従姉はわれに
この朝も口角上げる鏡の中洪野選手のやうにはなれない

鈴木美耶子

泥水花と謂れし花よハスの花香しきその香部屋に広がる
盆仕度終へたる仏間の襖外す大き提灯の家紋の重み

吉見 幸子

テストあけ俺の集中は限界と猛暑のなかを中一はサッカー
小学生は一人お泊りの夜となる「好きな所へお布団はこぶ」と

牧原 正枝

現代学生百人一首

東洋大学

「地元出る。」決意を伝えたその時の涙溢れた母の表情

山形県立酒田光陵高等学校三年 佐藤 優花^{ゆか}

飛行場父の顔見てついほろりごまかしたくてあくびを一つ

山形県立酒田西高等学校定時制三年 田村 麻実^{あさみ}

夕風が風鈴さえも止めるのに時間はとまらぬぼくらの青春

鹿嶋市平井中学校二年（茨城県） 梅崎 沙彩^{あや}

まだ見えぬ私はどこだと夢探し空に透かした白紙の希望

宇都宮海星女子学院高等学校二年（栃木県） 砂川 実結^{ゆづ}

大地揺れ山から岩が滑り落ち一瞬にして消えゆく暮らし

コロンビアインターナショナルスクール二年 神田

蓉よう

大嫌い何度も思った帰り道でも君以外とはケンカはしない

埼玉県立川越女子高等学校一年 原

彩あや
佳か

日本史の教科書載ってるあの人もゲームの中では私の恋人

埼玉県立越谷西高等学校三年

小こ太だ刀ち玲れ
奈な

コンクール運命決まる12分私たちの音ホールへ響け

埼玉県立越谷南高等学校二年

尾崎一ひと
美み

贈呈誌

森岡陽子

青森アララギ 第四百九号

○菩提樹の背丈に木陰広がれり真昼きびしき木漏れ日の下

鈴木隆之

○山際に落ちなむ夕日赤々と八甲田連峰くまなく照らす

岩田鶴枝子

○小屋の上を飛びはね走る猿のファミリー時々吾を威嚇すること

木浪みつゑ

○けさの雪音なく静かに落ちてくるスノーダンプと夫の出番

成田夏

○耿々照る月眺め酒を酌む父の形見の盃に酌む

浜田清勝

鹿児島アララギ 9月号

○赤錆びた鉄路の間に細々とハマヒルガホは群れて咲きをり

千葉源治

○夕闇の御八日踊りの鉦太鼓夜風受けつつわが庭に聞く

中山タマエ

○時刻むごとく海風吹き通る土用丑の日磯の香のして

浜畑松枝

○山の田に稲刈りをれば手許より雉が飛び去る羽ばたきながら

江藤金博

○啄める実のなき庭に小鳥見ず黒揚羽蝶今日も来て飛ぶ

奥悠子

冬雷 10月号

○汚れなき睡蓮の白に向かふけふの心は自づと浄まる思ひ

橋本佳代子

○空しらみ遠くの鴉が三声鳴き近くの間が三声を返す

嶋田正之

○窓という窓のすべてを開け放ち朝の海風部屋に呼び込む

飯嶋久子

○引き出しを開ければ底より七円の「葉書き」黄色くなりて出でくる

野村麗子

○準優勝甲子園の土踏まざとも被災地沸かす大船渡高校

金野孝子

落ち葉のワルツ

高橋育郎 作詞

おちば おちば

落ち葉は 舞うよ

おちば おちば 風にたわむれ

小鳥のように 蝶々のように

歌いながら 踊っているよ

おちば おちば

黄色い 落ち葉

おちば おちば まつかな落ち葉

小さな窓の 白いカーテン

入日を浴びて 染まっているよ

おちば おちば

秋の おわりを

おちば おちば さよならしてる

また来る春を 夢見て眠る

雪のふとんで 眠るよ落ち葉

おちば おちば 落ち葉は舞うよ

おちば おちば 落ち葉は歌う

『俳句』

自然薯の折れし安値と道の駅

森岡陽子

一筋の道へ吹く風揺るる萩

とんぼうの小さき命池の端

コスモスや我ら小学同級生

松本周二

訊ぬれば小芋親芋芋頭

鰯飛んで水輪広ごる静寂かな

箸先に逃げる子芋やひとり膳

田中清秀

風一過隠れ小路の零れ萩

枅酒や温もり残す衣被

赤蜻蛉平原を指すクラーク像

浜田紀政

月いちの病院通ひそして秋

涼新た男坂より登りけり

著けしやでこぼこ道の月明り

重野善恵

秋蝶の地に影映しさまよへり

満月に見詰められたり見詰めたり

草ひばり鳴く声のして姿見ず

山迫京子

百円でさつま芋買ふ無人店

エレベーターの隅に椅子置く敬老日

月山に雲一つ置く芋の秋

山元正規

曼殊沙華畦吹く風の照り翳り
夕空のひととき赤き曼殊沙華

百日紅葬祭場の昼静

植村公女

物置となりし犬小屋天高し

車庫前にサンダルひとつ八月尽

掛軸の東北地図や鳥渡る

今泉如雲

芋煮るや青森ひばの菜箸で

函館に津軽言葉も秋の潮

百年の歴史に咲きぬ吾亦紅

今泉由利

風神は紐を解きたか野分風

白く咲き真赤くなりぬ実南天

夜の秋のうち直すべき句読点

杉浦弘

掠の実を踏んで丈山屋敷跡

ぎんなんを拾ふ長靴がぶがぶと

十字路を篠懸落葉右往左往

櫓田の枯れ美しく靡きけり

かさね吟行会 「新宿御苑」 九月

田中清秀

かさね会では平成二十四年の一年間、新宿御苑を毎月吟行して四季折々の自然の変化を楽しんだことがある。草木の色、鳥の声、咲く花々、空の色や風の薫り、その微妙な変化を毎月行くことで直に感じられ感動的な散策であった。

新宿御苑は江戸時代には信州高遠藩主内藤家の江戸下屋敷だったものを明治に入り皇室の庭園となり、戦後になって国民公園として一般に公開された。その広さは約十八万坪、周囲三・五キロ、苑内はイギリスおよびフランス式の庭園と日本庭園を巧みにデザインした風景庭園の名作である。令和元年九月十三日晴れ、前日の台風の影響は残すものの、秋風の吹く爽やかな日和となった。

秋澄むや鳥鳴き枝を飛びわたる

陽子

ユリの木の根方のベンチ秋立ちぬ

由利

己が世の今日を限りと秋の蟬

素山

秋澄むは、上空の気温の低い空気が降りて来て、眼に

入るものすべてくつきりと見え、耳に入る音もはつきりと聞こえるようになる、そんな秋の特徴を掴んだ季語である。残暑がやつと終わり過ぎやすい季節となった。散策路には多くの木の実が転がっている。一般に「どんぐり」と言われるのはクヌギやナラ、カシワなどのブナ科の樹木の実の総称で、艶のある果皮を持つ堅果と椀状のはかまと呼ばれる殻斗を持つている。御苑でシリブカガシという実の底がへこんだ変わった種類を発見した、また、細長くすらっとした形のものもあり、どんぐりは奥が深い。そして、森に住む野生動物の貴重な食料だが、炒って食べても美味しい。

銀杏の実も多く転がっていたが熟すと外皮から異臭を放つ。動物に食べられない為というがその匂いには閉口する、ただ、殻の中身はお酒のつまみや茶碗蒸しには欠かせない。

その口を堅く結べる櫟の実

周二

幼子の拾ひて渡す銀杏の実

紀政

銀杏の実踏まずに飛びて異国の子

さち子

子供はどんぐりの実に棒を刺して独楽にして遊ぶ、どんぐりを歌った童謡もある。この季語にはどこか郷愁を感じさせるものがある。

新宿御苑は多くの樹木が四季を問わずに鬱蒼と茂って

いる。木々の隙間から見られる高層ビル群は都心ならではの景色でもある。多くの樹木はケヤキ、エノキ、ムクノキのようだがその違いが難しい。いずれもニレ科に属し葉の形態や表面のざらつきなどよく似ている。葉の大きさはほぼ同じだが、ケヤキは先端が尖り側面は弧を描いて丸く独特のきよ歯がある、エノキやムクノキのような三行脈はない。ムクノキの三行脈は葉縁に達しているがエノキは達していない。詳しくは解説書に書いてあるので、興味ある方はゆっくり観察して違いが分かると楽しいと思う。

旧御涼亭は昭和二年に昭和天皇のご成婚記念として当時の台湾在住邦人の有志により寄贈された、国内でも希少な本格的な中国建築様式である。入口の丸窓には古代文王を賛美した詩文が記され、内部からは日本庭園が望むことができる。涼をとりながら池面に映る青空と流れる雲を眺めての休息は心が和む。

秋澄むや雲早き日の池の面
高樓に肘つき眺む秋の雲

正規
清秀

今年のヒガンバナは咲くのが遅く、色づきも良くないらしい。温暖化の影響なのかは分からない、ただ、毎年お彼岸に合わせて必ず開花するこの花は自然の摩訶不思議さを感じさせる。また、御苑の奥深いところに生える

気根（きこん）も不思議な形態である。植物の根は本来地中に伸長するがまれに気根として茎や幹から空中に出る場合がある。呼吸したり、貯水したり色々な機能があるようだがその生命力には本当に感心する。

沼杉の気根の群や水引草
繊細に描かれてをり秋の花

京子
れい子

句会は新宿三丁目にあるファミリーストランにおいてれい子会員の手配でランチと合わせて会場を提供頂いた。いつものように囑目三句出し四句選で行い、秋の気配が少しずつ感じられる新宿御苑の吟行は無事にお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 二〇一九年十一月八日（金）
場所 駒場公園
集合 井の頭線 東大前 十一時
申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（九二）

丸山 酔宵子

『我流油絵事始め』

噴火警戒レベル3。令和の浅間山噴火の中、久々に噴煙の浅間山をゆつくり描こうと一人浅間山麓のログハウスに。

都内は連日35度越えの猛暑。標高1000メートルの御代田のログハウスに着けば、一ヶ月以上も締め切つて噎せかえつた室内に風を通すべく、すべての窓を開け、ログの天窓もめいっばい開け放つと、高原の爽やかな風が木漏れ日の中を通り抜けて行く。ベランダにあるテーブルや椅子には噴火の火山灰がうっすらと被つていて、早速上半身裸で、ベランダも含めホースでシャワーそして拭き取り。

準備万端整い、いざ、ベランダにイーゼルを立てF60号のキャンバスを置いて、噴煙の上がる浅間山を描き始める。先ずチョークでラフに構図を取り、その上からキャ

ンバス全体に下塗りをするのであるが、これはあくまで我流で、果たしてこれでいいのか、今でも描くたびに不安がよぎる。

そもそも、油絵を始めたきっかけは青天の霹靂。外資系広告会社を10年で突然退職し、たった一人で資金も無い中で貿易会社を起業し、手形決済に追われる日々を過ごしていた。決済が無事終わるとひと安心で、「やれ銀座だ、六本木だ」と朝方までのバカ騒ぎ。そんな怠惰な日々の中で、酒以外にもっと落ちて着いて集中出来ることはと考える中で頭によぎったのが子供の頃、卓袱台（ちゃぶだい）で「一心不乱にクレヨンで描いた絵であった。」「よし、油絵をやろう!」と一念発起し、即道具一式を揃え、我流で始めたのである。絵を始めれば銀座の画廊や美術館に行つていろいろな名作を見て、「・・・そうか! ワイングラスは、ガラスの向こうを描けば透明感が出るんだ・・・」など一つ一つ納得し、どの先生にも就かず30年。ゼロ号から100号まで、筆やペインティングナイフを駆使し、遠近法もままならぬまま、只管（ひたすら）

我流で押し通してきた。

油絵を始めて十数年後、行きつけの画材屋に勧められ、産経グループ主催「上野の森美術展・日本の自然を描く展」に応募してみると、図らずも入選。その後連続11回の入選もし、毎年入選作を写真葉書にして暑中見舞いを出していたが、現在は煩わしくなり、只管（ひたすら）、我が遊（すさ）びに徹している。

気儘に、絵を描いていると集中力が増し時間がたつのを忘れてしまう。「・・・喉が渴くね・・・ビールでも飲むか・・・」グラスにビールを注いで、拙絵を見ながらのビールは美味い。「・・・入道雲はでかい・・・噴煙は負けてるな・・・」

噴煙を包み込むなり雲の峰

酔宵子

楽しい時間 84

山本紀久雄

2019年9月30日

神にならなかった鉄舟・・・その十四

結城素明が聖徳記念絵画館壁画の『江戸開城談判』を制作したのは昭和10年（1935）4月で、『内国勸業博覧会行幸啓』も同年に描いている。59歳時である。（参照「結城素明―その人と芸術」昭和60年特別展図録・年譜 山種美術館）

結城素明は二世五姓田芳柳による『画題考証図』（下絵）



に基づき描いたのであるが、素明は海舟が左に刀を置いていることに疑問を持たず、そのまま受け入れ制作したのであるか。素明は東京美術学校（現東京芸術大学）の教授という要職であった人物で、出発は「歴史人物画」というのであるから、歴史場面に登場する日本刀の取り扱いが、当然に常識として心得ていたはずと思うが、何故に疑問を呈しなかったのか。それとも刀の常識とは異なる構図であることを知りつつ、『画題考証図』通りに制作したのであるか。この素朴な疑問を問うには、結城素明という人物を検討してみる必要がある。美術評論家で昭和55年（1980）山種美術館学芸部次長に

就任した小池賢博氏^{まさひろ}が、昭和60年（1985）に山種美術館で特別展「結城素明―その人と芸術」が開催されるにあたって、「結城素明について」と題した二文を書いているので、いくつか特徴的な事を拾ってみる。

『結城素明は忘れられかけている作家である。長く官展で活躍し、東京美術学校で数多くの画家を育て上げているにもかかわらず、である。昭和32年（1957）3月に没し、その1年後に東京銀座の松屋で遺作展が開かれて以来、実に27年ぶりに、今回の展覧会で素明の作品がまとめて展示されるのである』

『結城素明は明治8年（1875）に東京府本所区荒井町で生れている。今で言えば、墨田区本所2丁目あたりである。生家は酒商を営む家で、本名の貞松は勝海舟が命名したと言われている。ちなみに素明の号も海舟である。海舟自筆の銘名記が残っている。素明は幼児から絵を嗜んでいたが、明治24年（1891）16歳の時に岡倉天心の紹介で、川端玉章に入門、翌年東京美術学校日本画科に入学し、明治30年（1897）卒業し、西洋画科に再入学している。卒業制作「兵庫行」は、出来ばえが素晴らしく、校外にも結城素明ありと知られるほどで、天心校長も期待をかけていた。下村観山を想わせるような達者な筆、彩色の大作だった』

『明治33年（1900）12月に東京美術学校西洋画科を中退、1年志願兵として近衛歩兵第二連隊に入営、翌年の12月曹長として除隊した。除隊後は本格的に洋画の方へ進むつもりであったが、明治35年（1903）9月に、母校の日本画科の嘱託となった。運命の皮肉である。』

明治37年（1904）2月に助教授に昇任するが、やがて日露戦争が始まり、召集されて留守師団付となった。明治38年（1905）秋に除隊。大正2年（1913）3月に教授となる』

《明治33年3月に无声会を創設。自然主義を綱領とし、常に自然の研究につくし、その実効を挙げるようにつとめた団体で、川端玉章の門下生が中心で、主唱者は結城素明、福井江亭（で）であった。日本美術院の理想主義、浪漫主義に対抗して、画風の上では日本美術院のいわゆる朦朧的な画風をよしとせず、西洋風の写実を日本画に摂り入れ、観念的な表現をきらい自然の風趣を写して、その情感を描き出そうとする主張であった》

《素明の主な入選、受賞歴は明治40年（1907）3月、東京勸業博覧会で「蝦蟇仙人」が入選以来、大正7年（1918）の第12回文展「夏山三題」で推薦を受けたように、毎年のように入選、特選、推薦、褒状が続いている》

《大正5年に金鈴社が結成された。金鈴社とは、会派の縛りが無い自由かつお互い切磋琢磨しあえる場としてつくられたのである。大正12年（1923）春から14年（1925）3月まで素明はヨーロッパに文部省留学生として滞在。帰国後の昭和2年（1927）には素明の傑作が二点ある。一点は5月の第二回東台邦画会展に出品された「寒山凍雲」である》

《もう二点は、同年10月の第8回帝展出品の「山街夕暉」（下絵）で、一転して、西洋近代画への傾斜を示している。江の島・片瀬の石切場の夕方の景を描いたこの作品は、これまでになく新しい境地を見せ、大胆な面的な分割された色面で画面を組み立てるやり方は、セザンヌやピカソを想わせるほどである。実に力強い作品で、のちの日本美術院の奥村土牛や小倉遊亀につながっているものがある》

しかし、この方向は中断され、昭和4年（1929）帝展に「嶺頭白雲」、昭和9年（1934）第15回帝展に「炭窯」などとなっていく。

この「炭窯」、一瞬油絵ではないかと思われるかもしれない。



『白河を駆け抜けた作家たち』図録の「結城素明と白河」を執筆した藤田龍文氏が《風景画については油絵のような感じさえ受ける作品もある》と述べている。

《素明には纏まった芸術観の吐露はないようである。雑観や評論文のたいくひあまり残されていない。大正2年1月の『多都美』に載った文章、「先ず自己の頭脳を作れ」は、若々しく、理

想にもえた文章である。素明は博学多趣味で、多才多能で、図案にも長じ、理知の人で『東京美術家墓所誌』『芸文家墓所誌』などを編輯刊行している。広くさまざまな流派の技法を知っていた素明は、教師として適任であり、多くの優秀な弟子が育ていった。その代表的人物が東山魁夷である》

最後に藤田龍文氏の評文を紹介する。《伝統的日本画法を川端玉章らに学び、更に西洋画法を積極的に取り入れた。独自の特色を失わず、新しい試みを散り入れ変化していった。しながら、余りにも博学多才であったため、画風の表現の幅が広く、素明の画風はどういったものか、代表的作品は何か、と戸惑ってしまう》

これが冒頭の小池氏の見解「結城素明は忘れられかけている作家である。長く官展で活躍し、東京美術学校で数多くの画家を育て上げているにもかかわらず、である」の背景ではないか。もう少し結城素明研究を続けたい。

絹の話 (108)

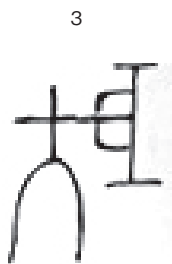
「アトリエトレビ」 今泉雅勝

絹の考古学入門 (その3)

銅鐸の鑄画像の推敲



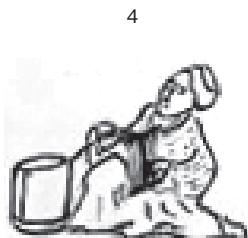
伝香川県出土(国宝)



殷代の甲骨文字



桜ヶ丘5号銅鐸



伊勢神宮の人形写真写生

銅鐸

銅鐸は弥生時代の青銅器の一種、形は釣り鐘状、上方に半円形の鈕、両方に扁平な鱗状の突起があり、厚手の物は20cm、薄手の物は150cmと大きさは様々で、近畿地方から多く出土していて、祭祀の為に制作された物と考えられています。

その側面の多くは狩猟、漁労、農耕の三つが表現されています。しかし上記の1、2図に関しては諸説がありますので、諸説をご紹介しながら色々推考してみたいと思います。いずれも活動の刹那を捕らえた表現が多く、絵画と言うにはあまりにも抽象的で、叙事詩を語る絵文字のようにも見えます。想像をかき立てられます。

稲の虫払いの道具説

弥生時代近畿以南はウンカの発生が多く、麻柄で作ったカセでイナゴをかせぎ落とす神事をしたと云われています。虫送りの行列が村はずれまで行き、銅鐸の多くが村境に埋められている事がその証ではないかと云われる所以です。

コンパス説

高床式住居など複雑な建築物が出現し、正確な円や直角を描く事が必要になり、カセの横木を垂直に立て円を描いたと云う説、上図3がそれを示唆しています。

漁具説

上図2には魚が描かれています。手に持つ道具は魚を採る延縄（延縄）を巻く糸巻きで、まるい点線は魚を入れる編袋ではないかと云う説。但し数多く出土した銅鐸の中で魚が描かれている物は他に有りません。

水平器説

人物像が手に持つ工字形器具は水田をならすとき使う水平器ではないかという説。

糸巻を取る「かせ」説

この時代身体を保護する織物は食と同じく大変重要な日常作業であつたと思われます。従来などの植物繊維から作る物より、軽くて柔らかく、温かい絹と云う新繊維が普及し始め、春繭が収穫され、糸を紡ぎ、機織りの準備が整う天の川が綺麗に見える頃、池や川の水の畔（魚などの恵みに感謝）に高床の棚小屋を作り、そこに女性（棚機（女））が心靈を受けて機を織（織）つた神事を「七夕まつり」として絹の普及増産に努めた事などを考えると、銅鐸の1、2の表現は、糸を紡いでその糸を桶にとり、そこから手に持った道具、即ち「かせ」に巻き取る姿ではないだろうか、図4からも推測出来るところから、この銅鐸の表現は「かせ」という説が有力になりました。

疑問？？

図4の女性性は、立て膝をして、「かせ」を胸元に持っていて、片方の手は自分の膝上で桶からの糸を支えています。ところが、銅鐸の表現1は「かせ」を自分の目線より少し高めに持ち上げて、片手は空を掴んでいます。

図2も類似しています。此れ等の図柄が糸を巻き取る「かせ」と断言するにはやや躊躇します。

当時中国から度量衡のシステムが移入され、「かせ」は糸を「かせ」に取る道具であり、何回巻くと1反分の糸である、と云うふうにな糸の量を測る道具として大切にされたのではないだろうか。この長さの基本は家を建てる時も、魚を獲る延縄を作る時も使われたではないでしょうか。銅鐸の奔放な図柄は糸を巻き取る道具としてばかりでなく、尺度の基本として活躍している姿ではないだろうか。

稼（稼）ぐ

銅鐸が作られていた時代、糸を「かせ」に巻きとり（糸）（かせからはずした糸の束）を作る事を「かせぐ」といった様です。沢山繯を作れば当然豊かになります。いつの間にかお金を稼ぐ事という様になりました。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2019年10月2日

よく噛んで

気がつけば10月です

今年も残すところ3ヶ月になりました

瞬く間に月日が流れて行きます

10月といえば

読書の秋でもありますし

食欲の秋でもあります

身体の疲れもあり

つつい甘いものを食してしまいます

食へることは決して悪くありません

季節の物を美味しくいただくというのは

身体にもとても良いんです

ただ

食べ過ぎが良くないんです

これはなんにでも言える事ですが

過ぎたるは猶及ばざるが如し という様に

美味しいものをお腹いっぱいまで食べず

出来れば腹八分にしましょう

あとは

良く噛んでゆっくり食べましょう

2019年10月7日

夏風邪

あれっ? と思うほどに

昨日は気温が下がりました

といっても本来10月といえますと

1枚羽織りたい位の気温ですよ

ここで身体を冷やすと

2〜5日くらいの潜伏期難をへて

風邪を発症しやすくなります

しかも

鼻 痰 熱 喉の痛み 声枯れ

といったオーソドックスな風邪が

引き続き流行っています

さらに

この風邪 長引くと思うのですが

実際は5日くらいで治っているのですが

似たような症状の風邪が何個あるんです

それを

風邪が治ってきたけど疲れがあり

免疫力が回復しきっていない時に

順番に感染しているので

長引く風邪とかわれています

気づいた方もいらっしやると思いますが

これが夏風邪なんです

暦的にもう夏ではないですが(笑)

年末に向けて

身体をしっかりケアして行きましょう

「江上浩二の独り言」 23 江上浩二

何種類の英語？（第2弾）

これは私が1985年後半から約20年間勤めた米系外資系企業で数多くの英語の訛りを聞分け体験した話で、世間一般論ではない事を断っておく。と書き始めたものの、文章量の都合ともっと知って頂きたいという気持ちで重畳し以下の第2弾となった。

もう、知り合いの出自に気にせず進めたい。

フランス人でフランスの現地法人に勤務していた方は家族を連れて米国本社に移り、新規事業部立ち上げの中核となった。しかし、その事業から撤退することが決まり、本人は類似ビジネスの新会社に移り、事業を拡大させCEOとなった。しかし、別の会社を買収され、フランスへ戻られた。こういったダイナミックな期間でも交流を続け、私もその米系外資企業を早期退職し、コンサルタントになった。知り合いの方の会社を買収した親会社の上級エンジニアを紹介して頂き、米国の西海岸のカンファレンスでお会いしたりする中で、フランスの研究所で初めて会ってから、結局30年位のお付き合い合い。でも、フランス訛りの強い英語は変わらないようだ。

台湾系の方の話は、もっと身近である。1980年代の後半、初めての台湾出張でお世話になった。その時米国本社を代表し東京から出向いて台湾企業の工場視察をしたが、使っている機械は日本製、その機械に投入する材料も日本製であった。当時は台湾新幹線も無く高雄から台北への移動は小型飛行機だった。さて、国際展示会では自社の機材を持ち回りで使用することが多い。米国の西海岸ロス郊外にあつた当時の関連会社に当時では新しい光通信用開発装置を試作してもらい、私がロスまで出向き、現地でチェックしてから日本へ移送、そして自分でセットアップして展示した。それを池袋の展示会場まで見に来てくれたそのマネージャは、数カ月前の台北での展示会でその開発品を展示、紹介したいと言って、次の出張では、私は台北まで行き支援した。池袋まで来られた時夕食に誘ったが、展示会場の近くの東池袋から都電に乗って何とかという駅まで行くという。根掘り葉掘り聞くと奥さんの姉が居るという、しかも永住して日本の大学の先生をしているという。都電の東池袋駅をご存知とは恐れ入った。その台湾の方の英語は分かり易く、綺麗で訛りは少ない。

イラン出身のエンジニアのストーリーは壮絶で日本人では経験出来ないものだ。父親が大学の先生をしていて反体制派で、革命が起きた時高校生だった知り合いは危険を察知し母国を陸伝いに密出国し、欧州内を転々としていたという。偶然か幸運にも米国がイラン系の方に green card を発行

するというチャンスに応募し、当選し、米国の地を踏んだそう。当然お金がないので働き資金を貯め、大学に入ったそう。だが、資金が続かず、あえなく退学せざるを得なく、再度働き資金を貯め、大学に再入学し、今度はめ得太く卒業できたという。エンジニアとして社会へ出るわけだが、始め友人が応募した企業だったが、友人が断念したとかで、その知り合いのエンジニアが代わりに応募し、入社したのが私と同じ米系の親会社で、ある時期からプロジェクトで一緒に仕事をした仲間となった。俺はベルジャン、日本の和太鼓が好きで鼓童のファンだと聞いた。後に彼が結婚した時、プレゼントで鼓童のCDを贈った。TVで聴くベルシャ語の訛りは私には覚えがあるが、彼の話す英語に訛りは感じない。

シンガポールに住む中華系のエンジニアの方はお爺さんとか親御さんが若い時に中国の福建省（フーチャン）から移住して来たそうで、先ず日系の企業に勤め始め、その後転職して米系企業で二緒した。カタコトの日本語と中国訛りの英語を話す。日本に出張で来て、赤坂の普通の中華店で担担麵をご馳走した。こんな美味な担担麵を食べたことがないという。結婚してファミリー、親とおばあさんと暮らしていたそうだが、奥さんも仕事を持ち、マンション住まいでそのくらいの暮らし向きと収入だと、若いメードさんを雇わないといけないルールがシンガポールにはあるそう。それで近在のインドネシアだとかフィリピン出の若い女性のメードさんにもマンションの1室は用意しなければならない。私より若い彼

は、ITが普及し始めたとき、住んでいるマンションの自分の部屋の無線電波が道路を隔てた米系の有名なSコヒー店でノートパソコンでも受けられると言って自慢していた。当時日本ではIT社会・機器で先行していると宣伝している割には、韓国やシンガポールより遅れていた。

非常に長くお付き合いした米国人の生活。一般に彼らは結婚前に比較的長く同棲生活をする。その同棲しているアパートにも呼ばれたこともあった。更に結婚が決まり、結婚前に男友達だけ、女友達だけで独身最後のアメリカ式「ナンキ」パーティーをする。そこにも呼ばれ、湖畔の別荘から裸で湖に飛び込んだりして、独身の最後を楽しむそう。さて、結婚され、中古の一軒家を購入した。米国出張の際、家を見てくれと言われお邪魔した。すると若そうな老人が古い家の壁に壁紙を貼っていた。そう俺のパパだよと紹介され、話を聞くと学校の体育の先生をしていたそうで、州をまたいで結婚した息子の家の修繕に來られていた。奥さんはイタリア系で仕事を持ち、独身時代から結婚され何年かして、総期間8年で単位を取得、めでたく大学を卒業された。少し奇異な事を経験した、彼は米国の北東部の州の出身、私と南部にある会社の工場に行った際、前の晩に泊まるホテルのカウンターで、「俺、南部訛りが解りづらいので、お前（You）がチェックインしてくれ」と頼まれたことだ。英語の訛りはそんなものかも知れない。

漢詩研修（三十七）

千代田岳精会 平井茂行

「教育勅語」

朕ちんおも惟わフニ、我が皇祖皇宗、國くにヲ肇はじムルコト宏遠ニ、德とくヲ樹たツルコト深厚ナリ。我が臣民、克よク忠
ニ克よク孝ニ、億兆心ヲニシテ、世々厥よよそノ美びヲ濟なセルハ、此レ我が國體ノ精華ニシテ、教育ノ淵源、
亦實またじつニ此こゝニ存ス。

爾なんじしんみん臣民、父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信ジ、恭儉己レヲ持シ、博愛衆ニ及ボ
シ、学がくヲ修メ、業ぎようヲ習ヒ、以テ智能ヲ啓發シ、德器ヲ成就シ、進ンデ公益ヲ広メ、世務ヲ開キ、
常ニ國憲ヲ重シ、國法ニ遵ヒ、一旦緩急アレバ、義勇公ニ奉ジ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ。
是ノ如キハ、独リ朕ガ忠良ノ臣民タルノミナラズ、又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顕彰スルニ足ラン。
斯ノ道ハ、實ニ我が皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ所、之ヲ古今ニ通ジテ謬
ラス、之ヲ中外ニ施シテ悖ラス。朕、爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲニセンコトヲ庶幾フ。

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

- ① 両親に感謝する
- ② きょうだい仲良くする
- ③ 夫婦で協力する
- ④ 友達を信じあう
- ⑤ 自ら反省する
- ⑥ 博愛の輪を広げる
- ⑦ 知徳を磨く
- ⑧ 公のために働く
- ⑨ ルールに従う
- ⑩ 祖国を守る
- ⑪ 伝統を守る
- ⑫ 手本を示す

- (お父さんお母さん、ありがとう。)
- (一緒にしつかりやろうよ。)
- (二人で助けあつていこう。)
- (お互い、わかつてるよね。)
- (ごめんなさい、よく考えてみます。)
- (みんなにやさしくします。)
- (進んで勉強し努力します。)
- (喜んでお手伝いします。)
- (約束は必ず守ります。)
- (勇気を出してがんばります。)
- (いいものは大事にしていきます。)
- (まず、自分でやってみます。)

『曾良について』

中屋保之

古来、大業を成しえた人物にはそれを支えて影のように付き従い、時には諫めもする存在があるようだ。秀吉の羽柴秀長、家康の本多正信、近代では、読売巨人軍九連覇の川上監督に於ける牧野ヘッドコーチ等々。

「河合曾良」という。謂わずと知れた「奥の細道」で芭蕉に随行した人物である。蕉門三百人の中から、何故一人随行を許されたのか。想像を逞しくするなら、曾良は、芭蕉にとつて「旅」のコーディネーターであり、相談相手であり、会計管理をも託す几帳面な秘書として唯一無二の同志であつたと思いたい。

曾良については、芭蕉の偉大さ故か、山本安三郎氏が昭和十八年（一九四三）に『曾良道随行日記』を発刊するまではその評価は決して高くはなかつたという。「奥の細道」で芭蕉は、

黒髪山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

剃捨て黒髪山に衣更 曾良

曾良は河合氏にして物五郎と云ふ。芭蕉の下葉に軒をならへて、予が薪水の労をたすく。このたび松嶋象潟の眺、共にせむ事をよろこび、且は羈旅の難をいたはり、旅立曉髪を剃て墨染にさまをかへて、物五を改て宗悟とす。仍て黒髪山の句有。衣更の二字、力有てきこゆ。

《元禄二年四月一日。今日は衣更えの日。曾良は、この旅の出発にあたり黒髪を落とし、すでに墨染めの僧衣に衣更えをしたのだが、今日こうして黒髪山（註Ⅱ日光男体山）で衣更えの日を迎えるのも因縁に違いない》と、曾良の紹介を記している。この句を曾良の句としているが、曾良を印象的に登場させるために芭蕉が作つてここに入れたと解釈されている。芭蕉は、曾良の旅への覚悟に心を動かされたのであろう。

五月十三日、旅の目的地の一つである平泉での、

夏草や兵どもが夢の跡
芭蕉
卯の花に兼房みゆる白毛かな 曾良

合戦の全体像を夏草の中に浮かび上がらせた芭蕉の句に対して、兼房という忠義な老臣にフォーカスした曾良の句、この師弟の句が出色である。

元禄二年（一六八九）三月に江戸深川を発してから約四か月、金沢辺りで体調を崩し、ついに山中温泉で病に臥せってしまう。足手纏いを危惧した曾良は、養生のため師と別れて一足先に伊勢へと向かう。

終宵秋風聞くや裏の山 曾良

腹の病気で山中温泉から芭蕉と別れて先行したあと、加賀全昌寺で泊まったときの句である。病気とはいえ師と別れることになってしまった孤独感から、曾良は打ちひしがれていたことであろう。ただ一人でこの寺に泊り、江戸を出立以来ともに積み重ねてきた数々の日々を思い出して万感の思いがこみ上げ、眠れないままこの句になったと云われる。

曾良は腹を病て、伊勢の国長嶋と云所にゆかりあれば、先立て旅立行に、

ゆきく／＼てたふれふすとも萩の原 曾良

と書置たり。行もの、悲しみ、残るもの、うらみ、隻鬼のわかれて雲にまよふかことし。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露 芭蕉

「奥の細道」で芭蕉は、曾良との別れをこう残している。

元禄七年（一六九四）、俳諧紀行文『おくのほそ道』が完成。五月、江戸を出発して西国の弟子達へ「軽み」を伝授する旅に出た芭蕉だが、四ヵ月後に大坂で病に伏し、御堂筋の旅宿花屋仁左衛門方にて、十月十二日永眠してしまう。享年五十歳。何故か芭蕉の葬儀に曾良は参列していない。芭蕉没後八年目、元禄十五年（一七〇二）の秋にして、ようやく墓参を果たした時の句である。

一翁の墓にまいりてー おがみ伏して紅しほる汗拭ひ 曾良

芭蕉の死とともに俳人曾良もその役割を終えたといえよう。また、芭蕉没後に俳諧への意欲を失い離れてしまった背景には、門人達の芭蕉の名声を利用しようとする動きや四分五裂の様に嫌気がさしてしまったとの説もある。

その後、曾良は、將軍徳川家宣の命により、宝永六年（一七〇九）に幕府の巡見使随員となり九州を廻るが、翌年、彦根可須村風本（現長崎県壱岐市勝本浦）で巡見の途上に病没した。享年六十二。戒名は賢翁宗臣居士。墓所は壱岐島の能満寺。元文五年（一七四〇）、没後三〇年を経て故郷・諏訪の正願寺にも墓標が建てられた。平成六年（一九九四）五月二十四日に旧勝本町と諏訪市が河合曾良の終焉の地と生誕の地としての縁で友好都市提携を結び、旧勝本町が旧壱岐郡三町と合併後も壱岐市に受け継がれ

濫水先生の詩

横山精真

「初夏村墟散策」

の韻に次す

台上偶作

始めて覚ゆ西風の台上に軽きを

頭を回らせば眼界物皆清し

飛び来たる啼鳥忽ち飛び去り

変えつて有り連呼す稚子の声

次藍水先生詩契「初夏村虚散策」韻

即事偶成（台上偶作） 横山精真

始覺西風臺上輕 回頭眼界物皆清
飛來啼鳥忽飛去 變有連呼稚子聲

初夏村虚散策 横溝藍水

紅襟飛燕掠流輕 青柳垂絲拍岸清
龍畝麥芒猶綠嫩 中在豐稔太平聲

（語釈） ○台・・・テラス。 ○西風・・・秋風。

（通釈） テラスに出てみれば、秋風がそよ吹くのを今日初めて感じる。快さに回りを見渡せば木々も空気も遠くの景色も皆清々しく見える。

テラスを掩う桜木に飛んできた小鳥はひとしきり鳴くと飛び去ってしまった。それに変わって「ジージー、ジー」と孫の呼ぶ声がした。

※是は次韻の詩です。ここでは横溝女史が送ってくれた漢詩の庚韻「輕・清・聲」の文字をそのまま使って作詩したものです。

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

田兒の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ藤野高嶺に雪は降りける

田兒之浦從 打出而見者 真白衣 不盡能高嶺爾 雪波零家留(③三一八、山部赤人)

(口訳) 田子の浦を歩きながら(見晴しのきく所へ) 出て眺めると、まっ白に富士の高嶺には雪がふり積んでいるよ。

赤人の有名な富士山を詠んだ長歌の返歌。この歌は後で述べる如くその改作歌が人口に膾炙している。「田兒の浦ゆ」の「ゆ」は「ひなの長道ゆ」(③二五五)で述べた如く「田子の浦と呼ばれる海岸(當時のは現在よりもっと西よりで薩埵峠の東麓より、由比、蒲原を経て吹上浜に至る弓状をなす入海を指した)を通じていて」の意で、通過地を指す。「うち出でて見れば」は古くは「田兒の浦にうち出でて・・・」とか「田兒の浦より、(舟)で沖の方

へうち出でて・・・」とか解した人もあつたが、これ等は当たらないとされている。「視界のきかない山蔭道を歩いていて、突然ぱつと視界がひらけて眼前に秀麗な富士の姿が現れる―その地点へうち出て見ると」の意である。「相坂をうち出でて見れば近江の海白木綿花に波立ちわたる」(⑬三三三八)も相坂山を越えて湖畔の景に接する地点に出ることを言っている歌で参考になる。「真白に雪は降りけり」と言う所を「真白にぞ」と大きく強く係つたので「雪は降りける」と連体形で結んだのである。「けり」は詠歎で「降り積っていることだナア」の意で「降りつつ」止めの表現のように、雪が現在降り降りして・・・の趣きではないことを注意したい。即ち、新古今集ではこの歌が改作されて「田子の浦にうち出でて見れば白たへの富士の高嶺に雪は降りつつ」となり、更にそのまま百人一首にとられ、為にこの歌の方が人口に膾炙しているのであるが、万葉の写実と新古今の幻想、質実と虚飾の相異点を見ることが出来て、比較して万葉のよさを知る上に仲々有益である。

雨(1)

夏目勝弘

今年もまた、豪雨による大きな、被害が起きている。「ノアの箱舟」の話が、脳裡をよぎる。その内容は、悪がはびこり、神が洪水を起して人類を一掃することを決意する。

このことを神は、正しい心をもつノアにだけ事前に告げ、箱舟を造るよう命じる。

ノアは大きな箱舟を造り、家族と動物たちの番を乗せる。

大洪水は150日間におよぶが、箱舟に乗ったノアの家族たちは生き残った。

今は気象庁が、大雨の注意報を早目に通告するため、死亡する人は少なくなった。

神がノアの子孫に、二度と洪水を起さないと契約したが、今も地球上の各地では大洪水の被害が出ている。

なぜこのような大洪水が起きるような雨が降りつづいていくのかは、知るよしもない。

雨といえば、また今日も雨かと思うのみで雨のことは、何一つ知らない。

雨を知りたく書店を巡り、一冊の本を手にした。「三隅良平著、雨はどのような一生を送るのか」を手にし「雨」が少しわかるようになった。

気温が上がれば蒸発、量も多くなり、空中に雨の素になる雲も多くなると思うが、わからない。

三隅氏の著書によると、大気中に漂う微粒子のことを「エアロゾル粒子」というとある。

エアロゾルという凝結核がないと、雲ができない。雲がないと雨が降らない。

大気中に漂う最も多い「エアロゾル粒子」は、一番多いのは、植物の花粉や、植物に付着している。バクテリア、樹木から放出される揮発性物質から形成される微粒子など、その総量は1700万トン。

2番目に多いのは、風によって巻き上げられる、土ほこり、黄砂等その総量は1600万トン。

3番目は海のしぶきによって生じる微粒子で「海塩粒子」。

4番目は山火事で生じる燃焼物。(今アマゾンで起きている大火災によって、多くの微粒子が、宙に漂っている)

5番目イオウ循環の中で生じる硫酸塩粒子である。

大気中に漂う微粒子を核に、水蒸気が付き雲粒が発生して大きくなり雲となる。そして雨粒となり、雨となって地上に降る。

我々は雨は自然現象の一つとして、短歌や俳句等の素材にしている。

雨の科学などの知識など必要などないが、知らぬより知っていたほうが、見方、感じ方等がより多く得られると思う。

常に新しい事に挑戦し、感性を育ててゆきたいと思っている。万葉集のなかに雨を素材にした歌はどのくらいあるのだろうか。

また俳句にも数多くの雨の句があると思う、少し調べてみたくなり、万葉集を調べた。

初句18首、二句7首、三句4首、結句10首、夕立は初句2首 時雨は初句3首、

そして雷雨を探したが見つからず、雷で一首あった。その一首が

○雷のごとく聞ゆる滝の白波の面知る君が見えぬこのころ
次回に万葉集の雨の短歌と、俳句の雨の句を引用する。

「氷魚」のことから (226)

岡本八千代

令和の日日、刻々とすぎゆき、今日は正岡子規の糸瓜忌（九月十九日）。今頃は、子規庵のガラス戸の向うには黄みがかった糸瓜が風にゆれてるだろうに。……。

われつひに正岡の大人を見ざれども 見たるもおなじ写真まもれば 茂吉

と茂吉はその「白桃」の中（P637）で歌った。

私は、子規庵を訪ねた時（平成19年）、

「秋の日のビードロガラスの透かし影 棚よりぶうらり糸瓜三つ四つ」 八千代

と歌ったことを思い出した。その時買ってきた、手拭いを今日広げてみた。長い白地木綿に、草色一色で糸瓜の絵が描かれている。素晴らしく単純で美しい。今年も広げて見る楽しさは何とも言えない感動である。

さて、ここからは、坪内稔典先生の「正岡子規」言葉と生きる岩波新書（1283）を参考に子規の死後と母上のことを書いてゆきたい。

子規は、明治三十五年九月十九日午前一時ごろ、ひっそりと息をひきとったのであった。

絶筆三句の

○糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

○痰一斗糸瓜の水も間にあはず

○をととひのへちまの水も取らざりき

俳句は、十八日午前の句の揮毫に実は碧梧桐は立ち会って

たのであった。妹の律さんが紙を貼った画板を子規に渡した。子規は画板の左下を左手で支え、画板の上の方は妹が持ち碧梧桐が墨を含ませた筆を子規の右手に渡すと、いきなり中央へ「糸瓜咲て」と書きつけ、今度は「痰のつまりし」と一氣に書いた。また墨をつぐ。「次は何と出るかと、暗に好奇心に駆られて板面を注視して居ると」、「仏かな」と書いた——と。書いている時「子規は咳が出てきて咳が切れないので、如何にも苦しうに見えた」と言っている。そうして「書き終えてから筆を投げすてた。白い寢床の上へ少しばかり墨の痕をつけた」と言っている。碧梧桐は、「死後の子規の姿は、いまだに号泣苦悩したままの寝姿だった」とか…。

子規のお母さんと、妹のお律さんと碧さんと三人で、斜（しず）かいたなつた子規の体を真直になおしたのであった。左向きにぐったり傾いている肩を起こして、お母さんは、「さあ、もう一ぺん痛いというてお見」とかなり強い調子で言われた。をばさん（子規の母上）の眼からは、ポタポタと雫（しず）が落ちていた——と。

その時、虚子も来ていて、子規の最後の場面を見とどけた母・親の気持ちに涙したのであった。……。

かくして、新聞「日本」は明治三十五年九月二十一日に、「正岡子規の絶筆」として、「糸瓜咲て」と「痰一斗」と「をととひの」の三句が載せられたのであった。

子規の「ソップは来て居るのぞな」、母上の「サア、もう一遍痛いというてお見」が私の心の中に残って消えない。親と子の愛情というものは誰もがそういうものかと涙する私。

編集室だより【二〇一九年九月】

今泉 由利

○新宿御苑へ俳句の吟行。

アルゼンチンで小学校を卒業する子供達を、日本の中学校で学んで欲しく、アルゼンチン住いから、東京に引越してきたとき、新宿御苑の塀に添うところに住いを定め、御苑を自分の庭のように暮らした。その頃は自転車で入園出来たから、由野はここで自転車を覚え、雪が降れば、大きな雪だるまを作り、自宅の窓から雪だるまの融けるまでを見守った。由野の部屋の望遠鏡は、巨木の鳥の巣に焦点が合っていた。御苑中其々興味のままに、最後はユリノキのベンチに集合するのだった。

御苑では、ついつい思ひ出に浸ってしまふ。

○王子北とびあ最上17階のレストランで「詩吟の会」の暑氣払い。まず、展望ロビーで、関東平野が三百六十度見渡せる。秩父連山、赤城山、筑波の峰、富士山。お箸でいただく「ステーキ御膳」。また来年も！

○出光美術館「奥の細道・三三〇年・芭蕉」

大好きな美術館。事ある毎にお世話になっていく。展示される作品と、一体になってしまえるよう

な。落付いていられる大切な処。

一六八九年三月下旬、江戸を発つて松島、平泉を巡り、出羽の各地を遊歴し、越後、越中、越前を経て、八月下旬に、美濃大垣へと。

あたかも芭蕉翁に寄り添っている：そんな気持ちになれるのでした。

○仏像彫刻

釈迦如来坐像を彫っている。坐像とは、救いを求める民衆を受けとめて下さるお姿。

解脱された、お釈迦様のお姿を彫るのだから、お釈迦様のことを、少しでも多く知りたい。一彫り一彫り、お釈迦様とお話をしています。インドより、今、私の所にまでおいでただけて、その道程を、そのお心を。今から二千五百年前、紀元前五世紀ごろ、北インドでお釈迦様が開かれた仏教は、インドからアジアへ広く伝播し、六世紀には日本に伝来した。

飛鳥寺の釈迦如来像の右手の親指と人差し指の間に、水かきのような縷網相があり、お救い下さるとき、その人が零れないように…。

インドの貴人は、爪を長くしていて労働や仕事はしないということです。飛鳥寺のお釈迦様は爪が長く表現されている……そんなことお話しながら来月には完成する予定です。

野菜・まんだら (21) 榧



○イチイ科 カヤ属

○東北地方、屋久島、濟州島、朝鮮半島…群馬県 福島県あたりが北限。

○常緑針葉樹、高さ20～30mに達する。雌雄異株。4月頃雄花は葉腋につき、雌花は小枝の先につく。果実は楕円形、2-3cm。

○実は、食用油、漢方薬膳。ビタミンEが豊富、中性脂肪やコレステロールを下げる。シアドン酸成分、リモネンやピオネンを含み、リラックス効果。

○平安時代、凶作に備える保存食、実から搾った油を生計の糧に…弘法大師によって広められた。

○大正時代の「大植物図鑑」には、「本邦植物質ノ油中最上の者ナリ」と記される。

○榧材は、最高級品とされ、水に強く、腐りにくいことから建築材、風呂桶、碁盤、将棋盤、まな板、お箸…。

○祖父が碁を好み、近所の方達が集まってきて碁を打っていた。その碁盤を“榧の木”と教えて下さった。その姿の美しく頼もしかったこと。

○スケッチをしていた足元に、木の実がおちていた。見上げると榧の木。拾い集めて持ち帰り、ホーロクで煎って、熱々をいただいた。こんなに美味しいものがおこちていたのだ!と本当にびっくり。それから後、ずっと榧の実を食べたい!と思い続けている。



今泉由利

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。